

## 六、パネリストによる問題提起(3)

### ナシヨナリズムにおける欧州と日本

田中 浩

はじめに

本日は、「欧州のナシヨナリズム」というテーマのシンポジウムではありますが、私は、アジアに位置する日本の側から当該テーマについて若干のコメントを加えてみたい、と思います。といいますのも、日本は、民族・言語・宗教・文化の面で、世界でも類をみないほどの同質性を保っている国なので、現在この地球上の各地で起っている何十・何百という政治的な民族紛争や宗教・言語などをめぐる文化闘争などについて、日本人ほどに理解の度合いが弱い国民は少ないのではないか、と思われるからであります。そして、そのことが、戦後五〇年たった今日においても、政治的リーダーといわれる人たちのなかに、アジアの近隣諸国に対して非礼な発言を繰り返す者が跡を経たず、国際的な批判や非難を受けている原因となっております。

そこで、ここでは、そもそもナシヨナリズムとは何か。また、少なくとも近代日本の成立以来、日本人は、他民族、他国家に対してどのような考えまた対応してきたかについて整理し、今後、日本人はどのような国際的感覚を身につけて世界中の人びとと交際していくべきかについて考えてみたいと思います。

## 一、ナショナリズムの概念

ナショナリズムという概念が、いつ頃から人びとの日常会話やもの本に登場するようになってきたかは定かではありません。一七世紀中葉以降のイギリスの市民革命期の思想家たち、たとえば、ホッブズ、ハリントン、ロックなどの著作には、ナショナリズムといった言葉は見当たりません。しかし、それに似た言葉としては、ポティ・ポリティック政治共同体・国家・シビル・ソサエティ政治社会といった言葉をあげることができるか、と思います。なぜならここでの政治共同体とか国家とか政治社会とかは、一あるいは二つ以上の民族が、生命・自由および生存の手段としての財産の保障といった「普遍的価値」の実現を目指して結集したものと、イメージされているからであります。つまり、それらの政治社会は、「国民の独立」と「国民の統一」というナショナリズム国民主義の具体化を表現したものであります。そして、こうした類のたぐいナショナリズムは、近代国家形成期のどこの国においてもみられたものであり、その意味で、この時期のナショナリズムは、「健康なナショナリズム」と呼ぶことができましょう。そして、この国民主義は、一八世紀末のフランス革命を契機に、まずヨーロッパ中に大きな影響を与え、近代デモクラシーの興隆を喚起した思想的基盤となっていたことはまちがいありません。

しかし、ナショナリズムという語が、二つの対抗・敵対する概念に分岐し、国家行動の政治・経済思想として人びとの間で強く意識されるようになったのは、いまから約一五〇年ほどまえの一九世紀中葉以降になってからのことだと思われまゝ。この時期、西欧における先進資本主義諸国は、ナショナル・インテレスト国家利益を最優先させて、植民地獲得に狂奔し、アジア・アフリカ等々の未開の地域を侵略し、それらの地域の民族や人種を支配下におくという行動（第二次植民地獲得競争）にでます。それは、陸羯南のいう「日清・日露戦争後の日本においても顕著となった極端な国民

主義」の名による帝国主義的ナショナリズムであります。また、こうした国家行動は、一九二〇・三〇年代の日・独・伊などの後発資本主義国家においても踏襲され、この時点になると、これらの国々では、国内的には、自国内の個人の自由を抑圧し、また民主的政治制度の確立を阻害したり、あるいは破壊しつつ、権威主義的独裁体制を確立せんとするファシズム国家となり、国際的には、自民族の優秀性を喧伝しつつ、他民族の侵略を正当化して、ついには世界大戦を誘発することになりました。したがって、帝国主義時代に入った時点以後の先進資本主義諸国家の行動やファシズム時代の日・独・伊などにみられる国家行動は、「特殊的価値」を主張する「悪しきナショナリズム」の典型と申せましょう。そして、これに対抗して、インターナショナリズムをかかげた社会主義思想が一九世紀中葉以降登場し、それに触発されて、東欧において民族自決主義が、アジア・アフリカ地域において民族の独立を求める民族解放闘争が展開されます。そこで、こうした民族自決主義や民族解放闘争もまた、「健康なナショナリズム」と呼ぶことができましょう。一九八九年末の「冷戦終結宣言」以後、「東西対決」・「冷戦構造」という敵対的な枠組のもとで固く閉ざされていた「パンドラの箱」が開いたのち、とくに旧ソ連や東欧諸国で噴出している民族紛争は、その理由と形態は多種多様であります。近代以降、展開されてきた「健康なナショナリズム」の精神を継承した、ソ連型独裁体制などの「悪しきナショナリズム」への挑戦、「異議申し立て」と考えてよいかと思われれます。

このように、ひとくちにナショナリズムといってもその内容・発現形態は多義的でありますので、北米諸国では、健康な自由国民主義の思想や行動をナショナリズム (Nationalism) と呼び、悪しきナショナリズムのことをステイティズム (Statism) と区別して、ナショナリズム概念の混乱を避けているようであります。

## 二、ナショナリズムと国家

さて、前述したように、ナショナリズムにも「健康なナショナリズム」と「悪しきナショナリズム」といったさまざまな方や区分がありますが、しよせん、ナショナリズムは、現実の国家を媒介にして語られてきた概念であり、したがって、現在のところ国家を抜きにしてはナショナリズムの問題は考えられません。

ところで、歴史的にみて一般的には、国民国家を形成することは、「健康なナショナリズム」の発露であるわけですが、この政治共同体には、人為的に線引された一定の地域・領域内に、人種的・宗教的・言語的・文化的に異なる多くの民族や人種がひとまとめに押し込まれている場合が多いので、多数民族と少数民族との間で、「普遍的価値」の争奪や民族的・人種的アイデンティティの主張をめぐってさまざまな衝突や紛争が起こるわけであり、そして、対立・抗争が極端にすすむ場合には、ついには、「国家の解体」へと突き進む場合もでてまいります。このさい、正当かつ十分な理由があれば、「国家の解体」も歓迎・促進すべきことかも知れません。しかし、「国家の解体」は、ホッブズのいう「万人の万人に対する闘争」が展開される「自然状態」にたちもどり、そのために、各人が自己保存を指して近代国家を作った目的そのものを破壊することになるかも知れません。

では、こうした「国家の解体」にもつながりかねないような紛争を事前に予防し、あるいは現実に起こった紛争を解決するにはどうしたらよいか。これについては、ケース・バイ・ケース、さまざまな方法がありましょう。場合によっては、国家を分立・分解すること（「連邦制」や「独立国家共同体」方式）が「健康なナショナリズム」を実現する方向かも知れませんが、あるいは、相互協調の方向をねばり強く模索することがベターな解決策かも知れません。しかし、ともかく、ここで重要なことは、人類にとっての「普遍的価値」＝自由・平等・平和の方向に沿って解決の

糸口をみつける努力と方向を追求することであろうか、と思います。ところで、現在のところ、人間は好むと好まざるとにかかわらず、安全と秩序維持を目的として人びとが同意した、権力的性格をもった政治共同体＝国家という組織や制度のなかで、その生命の安全や生活の安定、自由の保障を確信して生きているわけですが、歴史的にみても、国家の行動には、近代国家創設時に目指した「健康なナショナリズム」（自由国民主義、社会主義的国民主義）から「悪しきナショナリズム」（帝国主義、植民地主義、超国家主義、ファシズム、一党独裁主義）に転化する危険性をつねにもっております。したがって、このような転化をいかに防ぐか、ということがナショナリズムの根本問題となりますしょう。

これについては、明治維新前後にあつて、日本における近代国家形成をめぐる諸問題に真正面から取り組んだ福沢諭吉の提言を例に考えてみたいと思います。

明治維新の三年前の一八六五年に、福沢は開国論を内容とする『唐人往来』という文章を書いております。当時は、国学者や幕末志士らが神国日本を高唱して攘夷論を振りかざしていた物騒な時代でしたから、この文章は、手書きのままでも仲間内<sup>うち</sup>でだけ回覧されたものですが、ここで福沢は、アメリカ、ヨーロッパへの二度にわたる外遊経験をもとにして、世界には、「世界普通の道理」があつて、国同士が友好的な関係を保っているのです、開国しても外国が日本を乗っ取るようなことはないこと、また西欧社会では商業交易を通じて相互に平和的に共存している、と述べ、頑固な攘夷論を批判しております。この福沢のいう「世界普通の道理」という言葉は、いま風<sup>ふう</sup>にいえば、自由・平等・平和などの「普遍的価値」を指しているものといつてよいでしょう。なぜなら福沢は、文章のなかで、今後日本が理想とする国は、ポルトガルのような正義のいきわたっている国を例にあげ、このような国はたとえ小国であってもどこからも侵略されない、と述べているからであります。もちろん、このとき福沢は、まさか徳川幕藩体制が数年後に崩

壊するとは考えていなかったわけですから、これまでの封建思想を改めて、徳川体制の近代化を目指していたものと思われませんが、そのさい、体制のリストラの手段として、日本人としてははじめて「世界普通の道理」を基本にせよ、と述べていたことは、きわめて注目すべきことであった、いえましよう。

しかし、この福沢も、日本が明治維新によって開国し、国民国家として船出した時点以後は、国益を意識したナショナリスティックな観点を打ちだしてまいります。もちろん、そのさいにも、かれは、『文明論之概略』（一八七五）でもみられるように、近代化の条件としては、文明開化（ヨーロッパの普遍思想の理解と修得）によって、すべての日本人が「一身独立」し、またそうした個人や市民が集合することによって「一国独立」を達成すべきことを説いていますが、ここでは、当時の危機的なアジア情勢を目前にして、『唐人往来』で述べたような、世界には「世界普通の道理」があるというきわめてオプティミスティックな考え方が後景に退き、国際政治を「パワー・ポリティックス」の渦巻く世界としてリアリスティックに捉えております。

そのことは、一八八〇年代に入ってから福沢のアジア観が、日本の安全のためには隣国の朝鮮を文明開化させ、朝鮮半島を日本の防波堤にしようという考え方となり、それが思惑通りにいかなくなると、明治一八年に、『時事新報』紙上で「脱亜論」を発表し、日本はアジア諸国と袂別して西欧諸国と親しんを結び、先進諸国の仲間入りを果そう、という提言となったことにあらわれています。

にもかかわらず、福沢が、のちにみられたような国家主義的考え方には転落せず、「脱亜論」発表後も中国や朝鮮との交際を重要視しつづけているのは、明治維新前後にかれが修得していた「普遍的価値」を目指す態度が、かれの思想の根底にあったからだと思われる。したがって、ナショナリズムの二つの発現形態すなわち「健康なナショナリズム」から「悪しきナショナリズム」への転化をどうやって防止するかを考える場合、「普遍的価値」と「特殊

な価値」との関係をも十分にみきわめることが、いかに重要であるかが理解できる、と思います。

### 三、平和的なナショナリズムへの道

ところで、これまで述べてきたことからわかるように、ナショナリズムのかかえる問題を理解するためには、国内政治と国際政治の二つの側面からみていく必要があること、また、複雑にからみあったナショナリズムをめぐるさまざまな紛争を解決する方策としては、自由・平等・平和などの「普遍的価値」を基軸にして考えていかなければならない、ことはすでに申し上げました。

こんにちの国際社会は、国家を構成単位としている以上、国際平和を達成して、諸国民が安全に自由に生きていくためには、まずは、各主権独立国家が、自由で民主主義的な制度を確立しつつ、健全な市民の育成を通じて、一国独立を達成する自助努力が必要であることは申すまでもありません。他民族国家、多言語国家などでもみられる政治的・経済的・宗教的・文化的問題をめぐる紛争は、人類が「普遍的価値」をどうやって共有できるか、という論争や協同作業を通じて一步一步現実的な解決をはかる以外に方法はない、と思われれます。それでも解決できないときには、分立、連邦制などの方法を通じて解決するのも一つの方法かと思われれます。相互に「特殊的価値」だけを主張して、いたずらに敵・味方関係を拡大しては、一国内の平和は達成できないと思われれます。

ところで、ナショナリズムの問題は、とくに国家と国家の対立関係が起こったときに、いきつくところ、戦争にまで発展する危険性が発生いたします。したがって、ナショナリズムの問題を考える場合、最も重要なポイントは、この「戦争と平和」の問題であり、戦争は人類生存にとっての最大悪といえましょう。この点については、とくに日中

戦争から太平洋戦争に続く一五年侵略戦争を遂行した日本人にとっても十分に理解のできるところではないかと思ひます。

さて、こんにち、世界最大規模の国際平和組織は「国際連合」であります。しかし、この組織は基本的には、「国家」連合でありますから、第二次世界大戦が終結してから現在に至るまで、しばしば国家利益が優先されて国家間の衝突が起こったり、国家内の紛争についても、それぞれの立場を支援する外国勢力が干渉して有効な措置がとりにくいということになります。

したがって、現在の国際社会における国家と国家の関係は、ホッブズのいわゆる自然状態（これを個人ではなく国家に移しかえていえば、各国が各国毎に自己保存をはかり、生き残るためには敵国を打倒してもよい）とまではいかないにしても、半自然状態（国際平和の組織があるので）であり、そのため、国際社会には、戦争や衝突・紛争の危険性がつねに存在するわけであります。そこで、戦争や紛争の危険を回避するためには、国際平和組織を、「諸国家の連合」から「諸国民の連合」へと変える必要があります。これは、いわば、封建時代の小国家Ⅱ藩から、自由・平等な個人の集合体としての「普遍的価値」の実現をはかる近代国家へと転換させることを意味します。こうなると、地球世界は、「一つの権力」（人民の権力）・「一つの法」（法の支配）によって運営される、自由・平等・平和を基本理念とする「普遍的価値」の実現される地球国家・世界政府へとアウフヘーベン（止揚）されるものと思われれます。

## むすび

このように考えてきますと、真の国際平和を実現するためには、国家の枠を一つずつはずして、封建社会下の藩を



近代国家の州や県のようなものに変えられないか、ということでもあります。

この点にかんじていえば、EU（欧州連合）はその一つのモデルではないか、と思われれます。EU構成の一五カ国が、連合への道を可能にしたのは、一つには、それらの国々が、政治的・経済的・社会的・文化的な同質性が高いこと、そしてとくに重要な点は、自由・平等・平和等についての観念がほぼ共通している、という条件がほぼ揃っている、ということでもあります。

しかし、こんにち、国家間の格差はきわめて大きく、地球上においていくつかの平和的ブロックを形成し、それらが、相互に連合しつつ、最終的には国家の枠をとりはずして一つの政治共同体へと発展していく道は、決して簡単なことではありません。

ところで、この「諸国民の連合」への道を達成し実現していくには、まずは、各国が、自助努力によって、普遍的価値を基本とする民主主義国家を確立する必要があります。またそのためには、先進国が、中進国や開発途上国に対して協力を惜しまないことも必要となります。これによって、国際的に「普遍的価値」が共有され、また民族・宗教・言語などの「特殊のアイデンティティ」も尊重できる政治的・社会的条件ができるのではないかと思われれます。

この意味で、ナショナリズムは、民主主義と国際平和を実現するための根本問題と深くかかわり、社会科学や人文科学にとっての永遠のテーマである、といえましょう。

以上、たいへん簡単ではありますが、ナショナリズムを考えるさいの前提条件を述べ、パネリストとしての責任の一端を果たさせていただきたいと存じます。